

笠地藏譚

中野 真麻理

要旨 昔話「笠地藏」は日本全国に伝承されており、その広範な流布は、同話の歴史的古さを思わせる。仏像に笠を被せたことに依って善報を得たと語る類話は、覚鑿の『打聞集』や『元亨釈書』『諸国一見聖物語』『延命地藏菩薩直談鈔』のほか、尾張国天林山笠覆寺、上総国大悲山笠森寺の縁起等々に散見する。なぜ、これ程までに「笠」が頻出するのだろうか。仏像に奉られた「笠」の象徴性を考察し、「笠地藏」「笠観音」の源流について推測する。

その絵本の表紙には、雪野原の中、青空を背景にして、笠を被った一体の地藏尊が描かれている。表紙の左に「笠地藏様 文 関敬吾 画 福田豊四郎」と印刷されてある。発行は昭和二十一年一月十日（日本美術出版株式会社）、終戦後初めての正月であった。

本文第一頁を開く。囲炉裏の端では胡座した爺さまが藁を繙い、前垂れ掛けの婆さまは、針仕事に余念がない。

ムカシムカシ アルトコロニ マツシイ ケレドモ シヤウジキナ デイサマト バアサマトガ アリマシタ
次の頁を繰ると、一面の雪野原に雪が降り続けている。遠くに山々が連なり、集落が見える。画面手前、六体の石地藏の頭上にはこんもりと雪が積もり、地藏の背後に三羽の鳥、彼方の集落に続く一筋の道を、独り歩く爺さまの後ろ姿が描かれている。

オホミソカニ デイサマハ マチヘ オシヤウガツノ カヒモノニ デカケマシタ ソノヒハ ヒドイ フブキ
デシタ ミチバタノ 六ヂザウサマハ ユキニ ヌレテ 杵マシタ
町へ着いた時、爺さまは、正月の買い物などすっかり忘れてしまっていた。

オシヤウガツノ カヒモノハ スツカリ ワスレテ カサヲ カヒマシタ
店の戸口には「荒物」と書かれ、天井から箒や笠、籠などが下がり、足下には魚などの入った木箱が並ぶ。しかし、藁ぐつに頬かむり姿の爺さまは、他の物には目もくれず、笠に手を延ばした。

深い雪の中、笠を被った五体の地藏と白い手拭いを被る一体の地藏が立つ。爺さまの足跡が薄青く、雪の上に点々

と残った。爺さまは六地藏の前で屈むと手を合わせ、目を閉じた。

オカネガ タリナイノデ カサハ 五マイシカ カハマセンデシタ ヒトリノ ギザウサマニハ ジブンノ カ
ブツテキタ テヌグヒラ カケテアゲマシタ

家では婆さまが竈に火を焚き、爺さまの帰りを待っていた。赤々と燃える火、白や杵、包丁や組板、漬物桶、窓辺には一羽の鶏が止まっている。

バアサマハ イマニ ギイサマガ マチカラ タクサンノ ゴチサウラ カツテ キナサルト オモツテ カマ
ドニ ヒラ タイテ マツテキマシタ ケレドモ ギイサマハ ナンニモ カハナイデ カヘリマシタ

部屋の中には神棚が祭られ、天井から吊されたランプが点る。外は相変わらずしんしんと雪が降る。夜半、ざわめきを耳にした爺さまと婆さまは、そつと窓の外を覗いた。

タバ尔蒙ノガ ナイノデ ロニ アタツテ オシヤウガツラ ムカヘマシタ ヨナカコロニ ナルト ソトデ
サワガシイ コエガ キコエマシタ

元日の朝、雪は止み、初日が輝いた。家の前には千両箱三箱、俵三俵、反物などが積まれていた。爺さまと婆さまは驚くばかり、近所の子供たちも集まって大騒ぎした。

オシヤウガツノ アサニ ナリマシタ カドニ デテミルト オコメヤ オカネガ ドツサリ ツンデ アリマ
シタ キノフノ ギザウサマガ カサノ オレイニ クダサツタノデス ソレカラ フタリハ ラクニ クラス
コトガ デキマシタ

全十八頁の絵本の本文はここで終わる。本書冒頭には「笠地藏さまの梗概」、末尾に簡単な解説が付されており、「この話は各地に少しづつ變つて傳へられてをります。ここにあげたのは越後の話ですが、暖い地方に参りますと、

雨にぬれた地藏さまに笠をかぶせてあげたと語つてをります。四國では地藏さまといはず、正月さまと申してをります。すが、根本の信仰には變りありません」とある。

本格昔話「笠地藏」の語型は「大歳の客」と似る。いずれも地藏に「笠」を被せ、米や金子などの福を得る筋立てであり、九州から青森に至るほぼ日本全国に伝承された。その広範な分布は、同話の歴史の古さを物語っていると思われる。「誹諧職人尽」「笠ぬひ」には、

御地藏へ笠參らせん六ツの花　　寥和

という句が収められている。

二

覚鑊の談義を筆録した『打開集』（興教大師八百五十年御遠忌記念出版教学篇編集委員会編『興教大師覚鑊寫本集』第二卷所収、一九九七年）の記事に目を転じてみたい。

甲斐國笠着寺ノ因縁、郡司従者女笠ヲ佛ニキセタル故ニ、國司ノ子、小太郎殿ニヲモハレテ、後、太郎殿又甲斐國司トナル、其北政所ト云ハ件郡司ガ従者女也、

右の記事には「仏」とのみ記される。現段階では「笠地藏」に類する最も古い説話といえよう。「笠地藏」の富、『打開集』の良縁、いずれも人々にとつてはこの上ない現世利益であった。

死後、地獄の苦患を身代わりに受け、或いは地獄から救済してくれるという「地獄抜苦」も地藏信仰の要であった。諸書を披くと、民間伝承とは異なるもう一つの「笠地藏」の世界が広がっている。その代表的な例は比叡山に伝

えられた。『元亨釈書』卷第二十九「役夫賀能」の説話である。

役夫賀能が比叡山横川般若谷を通つた時、雨が降つて来たので一破宇に入った。そこには一体の地藏菩薩が雨に濡れて立つていた。堂が破れているため、雨を凌ぐことができないのであつた。賀能は粗末な笠を脱ぎ、地藏に被せ奉つた。⁽²⁾

能見像庇不_レ全雨灑被_レ體、脱_レ自小弊笠_ヲ覆_レ像頂_ヲ而去_ス、晚年受_レ病而氣絶、能生平無_レ善事、動多_レ惡業、便墮_レ地獄、猛火燒_レ身、其痛不_レ可言、

生前に犯した数々の悪事によつて、賀能は地獄の猛火に苦しめられた。その時、一比丘が現れた。それは以前、笠を奉つた般若谷の地藏菩薩であつた。⁽³⁾

時有一比丘、以_レ右手提_レ能出_レ鐵釜、其比丘右邊顏肩足及臂皆焦_{コケル}、然而告白、我在_レ瞻部洲睿山般若谷_ニ時、雨濕不_レ可_レ忍也、汝以_レ一笠蒙_レ我_ヲ、其志難_レ酬、故我入_レ火聚_ヲ濟_レ汝、不_レ顧_レ自燒_レ耳、言已蘇息、能便詣_レ般若谷、拜_レ像、像之燒爛、果如_レ獄所_レ見、

この説話は諸書に散見する。例えば、『延命地藏菩薩經直談鈔』卷一第二十七話「地藏尊二笠ヲ施シ免_レ地獄苦患_ヲ」である。『元亨釈書』と等しく、役夫賀能が俄雨のため、般若谷の破宇に立ち寄つて、地藏菩薩に破れ笠を奉る。後に病死して墮獄、一比丘が右手で彼を猛火の中から救い出す。地藏の半身は焼け爛れたという。同書は卷六第五話「横川法住寺地藏癩痢退治」、卷六第二十八話「難波徹源祈_レ叡山横川地藏_ヲ得_レ智慧_ヲ話語」にも、役夫賀能と法住寺地藏の靈験を取り入れている。『地藏菩薩感應伝』には「捨笠覆像」の項が立てられ、役夫賀能説話が収録された。

この説話は、至徳四年（一三八七）に草案成つた『諸国一見聖物語』横川の段に見出される。

此谷二般若院トテ坊有り、彼二貴キ靈像ノ地藏薩埵御座ス、彼房二賀能ト申テ、昔シ下僧住タリケルガ、極重ノ

悪人ニテ空ク成テ後、地獄ニ墮テ苦患有リケルニ、件ノ地藏菩薩、彼ノ苦ニ代リ地獄ニ入ラセ玉ヒテ御顔ヲヤカセ給ヒタル薩埵ノ在ス、實ニ濁世末代ニ憑ミ奉ルベキハ此尊ノ悲願也、（中略）然レバ此山ニ止住スル輩ラ、悪趣ニヲツル事ハ加能一人ナラデハ无キ也、爰テ十禪師権現ノ御託宣ニハ、我山ヲ離テ得脱ル者ノ一人僧智是也、吾我ニシテ地獄ニ墮スル者、一人賀能是也ト示シ玉ヘリト、同道ノ行者丁寧ニ語り教ヘ給テ、彼ノ般若院ヘ引導シ玉ヒシカバ、彼ノ持佛堂ヘ詣テ地藏菩薩ヲ礼ミ奉レバ、實ニ御顔ヤケコゲサセ玉ヒタル座像ノ地藏御座ス、其ノ時、此聖モ今世後世能引導ノ薩埵ニテ御座スナレバ、来世ノ引接ヲバ深ク憑ミ申ス也ト、心中ニ祈念申、

（曼殊院本・二三ウ二四オ）

至徳四年当時の横川般若谷には、賀能所縁の「笠地藏」の座像が確かに存在していた。右の書は関東天台談義所千妙寺の亮海の著作、初学の者を対象に、回峯行で巡るべき比叡山内の名所旧跡等について述べてある。亮海自身「大先達」と呼ばれるに相応しい修行を實際に積んだ行者であった。⁴⁾

賀能説話は正徳六年刊「山陰雜録」中巻「戴笠地藏」にも引かれ、今に石地藏に笠を被せる風習は、比叡山賀能の縁に依ると考えられるに至った。

吾朝於道路傍、多建立石刻地藏尊像、往来旅客、問以菅笠覆於石像、憶其因于役夫賀能之縁乎、

「笠」は「瘡」に通ずる。毒酒による業病に苦しんだ小栗判官は、照手が地藏に奉った「笠」の功德で病平癒を得た。小栗を救ったのは近江国柏原野瀬の「笠地藏」である。

柏原村大字柏原野瀬中仙道の傍に地藏堂ありて、石地藏を安置す、昔、小栗判官助重、美濃の青墓にて毒酒の難にあひ、将に死せんとす、妾照手姫之を悲み、病夫助重を車に乗せ、紀伊の熊野の湯に浴せしめんとて、此地に來り、悲狂して其冠りし笠を脱ぎて地藏に被せ、病夫の全癒を祈りたり、故に笠地藏の名を生ぜり、助重熊野に

入湯し、全癒して帰路此の地に至り、地藏に報いん為に一寺を建てたり、之を蘇生寺といふ、然れども寺は兵火に罹り、石地藏のみ現存す、
(大正二年刊『近江坂田郡志』下卷第十二篇・古跡名勝志「笠地藏」)

『小栗絵巻』(『桂宮本叢書』第十七卷所収)の筋に従うならば、病平癒の後、小栗は帝から五畿内五箇国と美濃国とを賜わる。美濃国に向かった小栗は照手と再会し、故郷常陸国に戻つて富貴繁盛、八十三歳で大往生を遂げた。小栗は美濃国安八郡墨俣(5)に荒人神として祭られ、照手姫は十八町下に契り結ぶの神と祭られた。

病苦なく、命長らえ、富と良縁に恵まれることは現世利益の最たるものであつた。

三

良縁を授ける利益は観音信仰の重要な要素でもある。観音に笠を被せた因により、良縁を授かつた説話が伝承されている。愛知名古屋の「笠覆寺」、千葉長生郡の「笠森寺」がその好例である。

天林山笠覆寺は現名古屋市南区笠寺町にある。本尊は十一面観音菩薩、尾張四観音の一である。『尾張国笠寺縁起』(『続群書類従』二七輯下所収)によれば、昔、呼統よつとの浦に一本の霊木が漂つて来た。禅光上人が夢告によつて十一面観音を刻し、小松寺を建てた。後に寺は荒廃し、本尊は荒れ野の中に立っていた。ある貧女がこれを哀れに思い、自分の笠を被せた。女はその後もしばしば参詣した。その験あつて、女は昭宣公の三男、兼平朝臣と結ばれた。女が折に触れて朝臣に語つた観音の靈験は、天皇の耳にも届いた。度々寺は荒廃したが沙門阿願によつて再建された。それが今の笠寺であるという。

大永七年(一五二七)三月二十七日、連歌師宗長は尾州清須へ到着、摂津守坂井村盛に持て成された。続いて熱田

神宮に於いて連歌興行。神宮を出立した宗長は、「笠寺」に立ち寄り、実際に笠を被った本尊を拝した。

宮をたちて、又、摂津守をのゝ鳴海まではるくとうちをくられ、名残おほくこそ。宮と鳴海のあいだに笠寺と云あり。人おほく詣ずるを見て立よれば、寺の本尊観音の頬はれて、笠を着はべる。殊勝にもあはれにもさまぐ也。此寺の昔も此本尊頬はれて笠を着せて奉りける。さてなむ笠寺とはいひけるにや。（『宗長手記』）

国文学研究資料館（史料館）には笠覆寺の縁起を所蔵する。写本一冊、刷題簽（粹のみ）に「天林山笠覆寺縁起」と墨書、前見返しにも同様の書名が記されている。内題「笠寺の由来」、尾題「笠覆寺由来記」。三井家寄贈本。冒頭に「尾張細埜氏記」（陽刻・長方印）等の朱の印記がある。寸法、縦二三・二糎、横一六・九糎、袋綴、楮紙。本文全十五丁。每半葉九行、漢字平仮名混じり、朱と青墨とで本文の校合がなされている。尾題の前に青墨で以下の記載がある。

于時天文拾年二月日

尾州愛智郡天林山笠覆寺

右青書以小寺玉晁老人所蔵本校讐

慶應二年丙寅四月廿一日（花押）

青墨による校合箇所は、本文の脱落を補訂する部分も多く、内題の下には「此題目無」と記されている。冒頭の同寺院建立の経緯は、諸書所引の縁起に比べてかなり詳しい。

昔、尾張の国愛知郡呼次の浦松古嶋（横）の小原（瀬）に坂野と申在（彼）所有、此所に坂野の太夫と云人侍り、一人の子を持たり、貴聖にてぞおわしける、御名をばせん（善）くわう上人とぞ申ける、天下（開）にきこへ有「し」智徳界行めでたき聖にてぞまし（奇）ける、其比呼次の浦（横）に一ツ（奇）のより木有、夜々光りをはなつ、是を見る人なやミ候也、「海士人大きに驚

きて、彼上人の御前にまいりて嘆申様、此寄木夜々光候二よりて見る人皆悩ミ煩ふ事限りなし、然るべきやうに上人の御はからいにて何方へもやらせ給へとなげき申ければ、則御弟子達引ぐして、彼より木に向て祈誓をめされて御帰りに有ければ、其夜の夢に告てのたまひけるハ、我ハ是、けんたん国(兼山)のよさんの霊木なり、衆生けのため日本国此地に來り、十一面觀音の像を造るべしとしめし給ひけり、頓て彼木を見給へバ虫くひ有、夢の告にことならず、天平勝宝八年(聖曆八年丙子年)巳丑人王四十五代聖武天皇の御宇に十一面觀音の像を作あらわし奉る、頓てくせんを申くたし、坂野(サカノ)の小原に寺を建て寄進の田畠多く、又寺家の僧數多招請して、天林山小松寺とぞ申ける、然るに彼觀音を作り奉らんとて、上人佛師をぞ尋られける、其時、年三十余りの執行者法師の有けるを、上人如何おもわれけん、見るに唯人(ひと)にあらず、形器量こつがらすべて化現の人とぞ見得給ふ、若御方ハ佛や作り給ふととわれければ、よくハ候わずとも、仰にてあらば作りまいらせんと申されける、上人、よろこび給ふ事(て御作り候)かぎりなし、扱佛師申されけるハ、仏を作り候わんに「ハ」、あらこもを七重敷、又しめをも七重引廻して、其内にて作りまいらせんと申さる、其用意をさせ、扱七日と申に、はや佛ハ作りまいらせて候、おがませ給へと申すて、
、「忽然に失ぬ、是を則尋申せば」熱田の宮をさして行給へバ、人を相添見せ奉れば、八劍宮の御前にて(かき消やうに失にけり)忽然として見へ給わず、毎日三度のもよひの物どもをば、ミなく棚に取おかれける、扱不思議の事にてぞ有ける、れいげんぶさうの觀音、一度あゆみをはこぶ人、利生をかうむらずと云事なし、上人ハ生者必滅のことわりにて、うせ給ひぬ、扱數百歳を経て、堂舎やうやう破壊し、佛像さらにあらハなり、寄進の田畠さへ國司のためにおとされて、衆僧やうくおちゆく程に、むかし佛ねはんし給ひてのち、祇園精舎の破壊にことならず、唯本尊ばかり彼松小嶋に残來りあれの、中、石沙(いし)のうへに立給ふ、

続いて、「長者太郎成高」の恋を発端とする悲劇が語られ、「笠」を觀音に奉る姫君が登場する。姫君に対して繰り

返される執拗な責め苦は説経諸作品とも通ずる趣向であらう。

抑も所(中此)の(並)ならびに鳴海の長者太郎成高とて有ける、田舎の人と云ながら、ゆふなる人を尋ぬるに、美野国(野上)やかみ
と云所に美野守とてよしある人おわします、姫君(ける)もち給ひぬ、姿有さまいとたへにして、一たび(度)あめばも、
のこびをなし、とうがん露にほころび、柳髪風にけつるがごとし、花の(包)にほひ、月のかたち、ゆふはかりなく、
父母(を)ことにかしづきけり、我身(流水)こそりうすいのみくづとしづみはつとも、姫君を巴都に登せ(て)さりぬべきまじわ
りもあらまほしやと思われける、然ば、長者太郎(長老)、傳聞て、いかなる便りもがなどうかゞひける程に、不思議の
つて有て、さうなくし(危)のびけるを、人さらにしらざりけり、有時御方(怪敷)にあやしき物有、いかなるぬす人おぼけな
き物ぞとて、さん(散)く(靴)にはぢに及けり、成高心(思)うき事におもひ、一期のはじ是なりと悲しみて、美濃尾張の兵(者)、
ろくりんはくろうのとうるいをかたらひて、一夜のうちに(中)きなみちんのごとく焼はらひけり、父母煙の下に
てうたれ給ふ、上下残る者もなくうたれけり、されども姫君ばかりをば其日のうちに鳴海の里へぐそく申て来り
ける「よしを」成高妻(女)聞て、たれ故(誰故恥)はじをかき、身をうしなわんとしけるぞ、にくきふるまひかなと、成高女房(女)
ハ去ル田舎の下臈と云ながら、たけくけうとき物なれば、姫君を取寄て花の姿をあやなくやつしはて、たけなる
髪を首(きうに切)きりになし、雪の肌を松の煙りにてふすべ、上にはつゞりをきせ奉り、いにしへハ源氏さごるも杯をこそ
手なれしに、今ハ水を汲妻木(爪)を(拾)ひろはせ、若菜をつませ奉る、昔の釈迦佛捨身の行を修し給ひけるにこそ、若菜
つみ水汲給ひけれ、我身ハさやうの心(左様)ざしハあらず、おもわざる浮世(つまき)の業(態)に身をいたづらに(つくし)尽はてなん事かなと、
明暮(歌)なげき悲(悲)しみ給ふ程に、日々におとろへはてにけり、成高流石(剛)になれし事なれば、いたわしくおもわれぬに
ハあらねども、ちからなく、たけき女の心にしたがひてとかなき人をかやうにやつしはて、今参りと名(付)つけ打し
ばりさいなみさま(様)く(罪)のつミにあて侍りければ、天命もおそろしくぞおほゆなる、姫君いとけなき心に思召ける

ハ、我身（如何成）いかなるつみのむくいにや有けん、一夜のうちに父母をうしない、又めのとのわかれといひ、一かたならずか、るうきめ（目）を見るらん、王照君がなくく都の雲井をよそに見て、呉国（胡）におもむく旅のそら、こかく一せひそうごゆめかんきう万里月の前のはらわたとかなしみ給ふすかうかなんだも我なきにはよもまさらじと天にあふぎ地にふし、ねがわくハ、氏神山王加茂春日平野松の尾住吉稻荷祇園八幡、わが前世の果報こそつたなくとも、唯今命をころしてたび給へ、父母の往生浄土へおくらせ給へとかなしみ給へども、あわれと云人さらになし、夜もやうく明ければ、家の内の女ハつらふて、今までおそくまいるなり、今参りつれて菜摘みに行と、嵐のほげしき日も、村雨（時）のふるにもふらぬにも、ミな人ハ笠をきれども、今参りばかりハきざりけり、雨露にぬれ、あさましきありさまを長者の帰依の僧の有けるが、あわれとおもわれけん、我笠を今参りにとらせけり、嬉しく悦（ふ）び事かぎりなし、有時、星崎の野に行て見れば、十一面観音の御堂もなく、雨に打ぬれて立給ふを、あわれにおもひまいらせて、我着たる笠を佛に着せまいらせて、なくく祈念し給ひける、欲（く）知（く）過（く）因（く）見（く）其現在果（く）、（思）欲（く）知（く）未（く）来（く）果（く）見（く）其現在因（く）と（か）や侍りバ、現當の果報ともにしられて頼なくおもへはさうりのむかしを思ふに、幼（幼）なる心（心）にねがわくハ衆生の苦にかわり給わんと誓給ひてこそ、観音勢至ともあらわれさせ給ひけれ、されば衆生若（衆）聞名（衆）離苦得解脱（衆）、或遊戯地獄大悲代受苦（衆）と誓ひ給ひて、ひとりとして二世の願ふけバもうこのつみに大悲をすて、ほんがくの都にかへらんと（衆）の御誓ハたのもしくぞおほゆるとて、我きたる笠をぬぎて御佛に着せ奉り、なくく帰らせ給ひけり、「つれたりし女わらハベ、今参こそ野中の木のふしのやうなる古き佛に向て手をあわせ、何ともなき事を打くどきて後、御僧のたびたりし笠を脱て着奉れりと云ければ、聖是を聞て、如何様の往来などの人にこそとらすべきに、ましてや佛に着せ参せたる志こそ哀れなれと、泪を流て悦び給ひけり」、

その頃、姫君の乳母「京極」は、戦塵の中から不思議に助かり、必死で姫君の行方を尋ね歩いてた。あらゆる霊仏靈社に詣でては、「南無大悲菩薩、姫君の生死の所をおしゑて得させたび給へ」と祈つた。熱田神宮へ通夜参詣した京極は、思いがけず、参詣人の中の若い女房から姫君の様子を聞かされた。

若き女房のなつかしげにちかづきより、さまざまの物語をしけるに、こしかた行末の事どもかたり出て、其後、扱も此程あわれなる事の侍りけるぞや、鳴海の長者の元に美濃国の美濃守殿と申ける人の姫、いづくしくやさしき人を取寄て、いかなるゆへのあるやらん、なさけなく身をやつし、あまの衣を着せ、妻木をひろわせ水を汲せ夜昼さまざまにさいなみなどするよしを、かたりもあへずなきにけり、めのと是を聞てたゑいり心もうせはて、さらに物もおほへず、しばし心をしづめておもふやう、是こそ神のしめしよ、是ぞ仏のおしへよとおもひとりて、京極はその若い女房に近付き、「私はもともと近江国の者です。知り合ひもない身でございますので、そのような有徳の人にお仕えしたいと存じます」と頼み込んだ。女房は快諾し、夜が明けると早速、京極を鳴海へ連れて行つてくれた。

京極は長者太郎の女房となり、「近江殿」と呼ばれた。眉目形、心映えは世に優れ、筆づかいも素晴らしい。長者は彼女を大切にし、「下女を一人、つけてあげよう」と言った。「我も独り身ですから、今参りを下さい」という近江の願ひは、即座に許された。

夜更人しづまりて局の前にて今参りて候と申こゑをきくより、めのとたおれふしたへ入ぬ、や、しばし有ておきなおり、今参りを引よせて、顔に顔をおしあて、我をばたれとかおほしめす、是こそ御めのと京極にて候、髪をもおろし古殿の御跡御上の御菩提を弔まいらせんと思ひまいらせしかども、今一度、たかいにかわらぬすがたを見へまいらせんとおもひて、山々里々寺々至らぬ所もなく参て尋まいらせ候也、其印にや、うき身姿をたが

ひに見ミへ候と、いひもあへず泪にむせびけり、姫君まどへる姿にて、しばし物をものたまわず、泪をながし、其俣ひれふし給ひけり、

姫君は、「私こそ、このように姿をやつし果ててしまいました、あなたはお変わりもない、いよいよ自分の罪業の深さが思い知られ、悲しいことです」と涙に咽んだ。二人は秋の長夜を泣き明かした。その時、乳母の詠んだ歌、せきこへてわかれし人にあふ坂のゆふつげ鳥の音（その音をなく）ききくぞうき

姫君も歌を返した。

わかれぢにすてし身をながらへてあふ坂の鳥の音ぞうき

このように詠み交わし、さて、近江は「風邪の心地」と言つて伏していた。今参りの姫君の方は泣き腫らした面持ちで出て来たので、「一体、何事があつたのだ」と、散々に打ち苛まれ、氣を失つたところを堀に捨てられた。

日が暮れてから、乳母の近江は泣く泣く姫君を探しに出たが、既にこの世の人ではなかつた。近江は姫君を膝の上にかき乗せ、「ただ我命を召されて、姫君を助け給へ」と泣き焦がれた。近江は、姫君が笠を着せ参らせた観音の話を思い出し、一心に祈念した。

又誠や、星崎に古キ観音の御堂もなくて雨露にぬれて立給ふが餘り御いたわしくおもひまいらせて、仏に我着たる笠をぬぎてきせ奉り、隙の時ハつねに詣てしてこそたまひしかと思ひ出して、南無大悲ちやうやくのふでんとかやの御誓、むなしくわたらせ給ふなよ、本願あやまりたまわずば、今度の命をたすけさせ給へ、天神地祇もあわれみ給へ、殊に熱田大明神、まもらせ給へと祈念申ければ、黒き衣を召たる御僧の来り給ひて、餘りななげき給ひそとて、忽然とうせ給ふ、扱姫君生かへり給ひけり、身に痛所なし、是仏の御たすけとおもひてかたじけなくぞおもわれける、

ところが、夜が明けると、「今参りが生き返った」と、皆はまた散々に打って殺し、そのまま堀の中に隠し埋めてしまった。

今度は乳母にも探し出せず、悲しみに暮れていると、以前の老僧が現れた。僧は土を掘って姫君を取出し、「さのみなげき給ひそ、我世の中にあらん限ハたのもしく思ひ給へ」と告げ、かき消すように消えた。姫君殺害が叶わず、成高の妻女の憎しみは増すばかり、罪もない姫君を苛むことは一通りではない。

そのうちに、時の関白殿の御子中将殿が都から下向し、成高の家に数日逗留することとなった。今参りの姫君は御馬の水を汲んでいた。この中将殿は天下第一の賢臣でいらしたが、姫君を御覧になつて、これはただ人ではないと大変心を動かされた。「あの水汲みを召して参らせよ」、姫君の美しさはいよいよ近まさりして、尋常ではない。身分を問われるけれども、姫君は何もお答えにならない。暁の鳥の音が恨めしく響く。

間もなく都から急な使者が立ち、中将は即刻、帰京しなければならなくなつた。姫君は相変わらず水汲みを続けていたが、仏神の利生あらたか、一段と美しい。「今度の引き出物にこの水汲みを参らせよ」との中将殿の仰せ、長者太郎の妻女は猛反対したが力及ばず、姫君を差し上げることになった。長者と親しかった者たちは「只今不思議の目に逢ぬべきぞ」とばかり、一門打ち揃つて成高に暇を乞うた。

姫君は乳母を連れて星崎の観音へ参詣し、懇ろに御暇乞いを申し上げて都へ上つた。洛中の人々は「兼平の中将こそ、田舎より北の御方を連れて上られた」と、貴賤群集して姫君入京を見物した。父の関白殿から事情を尋ねられ、乳母京極が参上してすべてを語つた。関白殿は、「姫君の父美濃守は私が親しくしていた人だ。一度、叡慮に背くことがあつたので国へお下りなされたのだ。私たちとも有縁の、いずれは世に出るべき人であつたのに」と、哀れに思われた。

それにしても、長者太郎が振舞は極悪非道と、勅勘の旨を下され、近国の武士に仰せ付けられて、討伐なされた。是も前世の果ではあるが、哀れなことであつた。

縁起は、観音堂の建立について「延長八年かのへ寅人王六拾代醍醐天皇の御宇とぞ聞へける、又かのへ寅ハ大明神の御縁日たる物をや、扱も此姫君の着せまいらせ給ひつる笠のゆへに、末代まで笠覆寺とは申ける、利生方便あらたにて、あゆみをはこぶ人ハ現當諸願成就せり」と述べ、以下のように結ばれる。

此観音の御縁起を委細書たるハ多けれども、笠覆寺の因縁を鷹司院の御勅宣に書下されしを記とゞむる者也、
彼ミそ木ハ（見）けいたん国（桂且）のよさん（善山）の霊木、天竺の霊山也、仏師と申ハ熱田八剣大明神の御作、日本に二ツの寄り木（有り）、一ツハはつせ寺の御本尊也、一ツハ笠寺（覆）の御本尊、まつだいの衆生を濟度の為にとて、りうさ（流沙）りやうを（嶺）し（度）のぎ百万里の波浪を越て此寺にとゞまり給ひ、十一面観音と現させ給ふ、衆生をどせんとの御誓たのもしき御事かな、されば昔よりあゆミをはこぶ人、決定として諸願満足せり、現當二世うたがひなし、不思議の観音にてましますば、たのミをかけ奉ぬ人ハなし、朝夕におこたらず一重（層）に南無十一面観音とねんじ（念）申べし、此縁起を一度ちやうもんする人ハ、千日の日参にむかふべし、いかやう成人にもちかづいて、さいく（細々）此縁起を聞かすべし、二世の諸願成就せん事、うたがひなし、惣じてうたがいのしんあらば、今生後生ともにつみをかうむりて、一ツとして心にかなふ事あるべからず、南無十一面観世音菩薩、つ（以下無）しみ給へ、信心の人にハ福寿をさづけ給ふとかや、

ふだらくや岸うつ浪の音までも

静なるみの国家安全

笠覆寺の縁起は浄瑠璃『笠寺観音御縁起』や説経『笠寺観音之本地』（『説経正本集』第一所収）に取り上げられ、

正徳六年（一七一六）刊『笠寺略縁起』も成立した。『笠寺観音御縁起』の挿絵には、厨子の中、笠を被る観音像が描かれている。今、『笠寺観音之本地』に依つて梗概を示す。

近江滋賀の里に住む中将有すえの娘あやめは、継母の謀により右大臣頼忠との縁談が破れ、一家は離散した。中将有すえは出家して諸国修行に出たが、近江七浦の地で雨に打たれる十一面観音を見て、自分の笠を被せ、立ち去った。一方、あやめは不思議の縁により、頼忠に見初められ、都へ上ることとなった。まさに船に乗ろうとしたところ、父と再会が叶った。すべては観音に笠を被せた利益であった。父は夢告によつて尾張国鳴海に寺を建て、観音を安置した。これが笠覆寺であるという。ここでは、笠を観音に参らせた人物は娘ではなく、父とされている。

他方、『松の葉』所載の歌謡「笠寺」では「ふかき思ひはみの尾張、来てこそ見たれ笠寺や」と歌われた。能「笠寺」に於いては、武蔵国出身の諸国一見の僧が、美濃尾張、鳴海の宿に到着する。ここに転輪山笠覆寺があり、折節三十三年の開帳というので、僧は参詣することにした。そこへシテの翁、高屋某が登場する。

シテ なふく、あれ成御僧、笠寺へ御参候はゞ御道知べ申候べし、

ワキ いや、是は笠覆寺へこそ参る者にて候へ、笠寺とは何国の事にて候ぞ、

シテ さればこそ、其笠覆寺を笠寺とは申候へ、笠を召したる観音の像にてましませば、笠寺とこそ申候へ、

（古典文庫『未刊謡曲集』四所収）

この寺の縁起は「東海道名所図会」巻三に所見、いかに流布したかが窺われよう。「東海道中膝栗毛」の弥次郎兵衛と北八もこの笠寺観音に参詣し、歌を詠んでいる。

旅人のいそげば汗に鳴海がたこ、もしほりの名物なれば

かくよみ興じて田ばた橋をうちわたり、かさでら観音堂にいたる。笠をいたゞきたもふ木像なるゆへ、この名あ

りとかや、

執着のなみだの雨に濡れじとかさをめしたるくはんをんの像

〔東海道中膝栗毛〕四編下)

四

尾張笠覆寺の縁起と酷似する説話は東国にも伝えられた。千葉県長生郡長南町笠森に現存する「笠森寺」である。同寺は大悲山楠光院笠森寺と号し、関東天台の談義所、天台宗長福壽寺の末寺であった。長福壽寺は三途台談義所・長南談義所とも呼ばれ、学僧たちの交流の場であった。⁽⁸⁾「長南町史」には三途台の十八僧正の天狗を退治した説話が収録されている。⁽⁹⁾

「笠森寺」の本尊は、尾張笠覆寺と同様、十一面観音である。坂東三十三所観音霊場の三十一番に当たり、⁽¹⁰⁾ 広重の笠森寺の版画も残されている。永井義憲先生「寺院縁起の背景——笠森寺の伝承をめぐって——」(『唱導文学研究』第一集所収、三弥井書店、一九九六年)に詳説があり、「敬白笠森寺縁起の事」「大悲山笠森寺縁起」「勅法東大悲山笠森寺略縁由記」も翻刻紹介されている。

明治十一年刊「上総国誌」巻二には、

大悲山笠森寺。在笠森村。^二延暦三甲子年。伝教開山。以後二百四十一年間。世代不詳。長元元戊辰年。五月十二日。延暦寺。良源法弟覚超。中興為第一世。

と見え、慈慧大師良源の法弟覚超を中興第一世として挙げる。「勅法東大悲山笠森寺略縁由記」末尾にも、長元元年

に行われた造営の際の導師を「横川の覚超僧都也」と記す。⁽¹⁾

「上総国誌」卷六「東総村志」には境内の規模、日蓮参籠譚が載る。

長柄郡 笠森村。有大悲山笠森寺。天台。寺記曰。推古天皇朝始メテ所_レ建。延暦三甲子年。五月十一日。僧傳教開山。以後二百四十一年間。世継不_レ詳。長元元戊辰。五月十二日。延暦寺ノ僧覚超。為_レ中興第一世。置_レ觀音像於正面。寶頭盧。大黒。不動。薬師。地藏。之諸佛羅列左右。其堂南面而在山頂。柱礎四面皆架_二造于懸崖。其高十有五丈。在_レ東云_二二天門。在_レ北曰_二二王門。自_二二天門登_レ西石階十一級。折而登_レ南木梯三十級。又登_レ東三十二級。通計七十三級。別當曰_二楠光院。舊寺領二十石。境内有_二七僧舎。寺什有_二數品。(中略)相傳往昔僧日蓮参籠此堂滿七日。而逢_二須田某。

日蓮は「そでにそふ涙の雨に濡れじとて けふかさもりを訪ね来にけり」と詠じた。

觀音札所笠森寺の御詠歌は、『坂東三十三所觀音靈場記』卷之十一「第三十一番上総笠森」に縁起と共に掲載されている。

同書「中興名_レ笠森_ト事」の段によれば、朱雀帝の御代、天慶年中、長柄郡桜井の郷、朝立山の麓、獅子之背という所に、箕を作つて糊口を凌ぐ夫婦があつた。夫婦には二人の息子と三人の娘があつた。末娘は名を於茂利といい、至孝至順の美人であつた。娘は尾野上の觀音を信心し、風雨も厭わずに二年余りも日参した。ちよつどその頃、帝の后が亡くなり、帝は憂いに沈んでいた。上総国司は玉前明神の託宣を得て、田植え祭りを企てた。国司は、早乙女に相應しい乙女を選び、五月十二日に府中の陣屋へ差し出すよう、触れを出した。季節は五月、

古寺の上ぶきに

仏壇の上もる雨やさあみだれ

〔犬子集〕卷第三

と詠まれたとき情景が展開する。

之二依テ國中ノ地頭ゴトニ、五月乙女ノ器量ヲ撰ミ、各衣服ヤ笠ノ美ヲ尽シ、我勝ニシテ相誥ケル、然ニ長柄ノ植女ハ、大雨ニテ藤沢ノ流ニ支ヘ、一日殿^オレテ府中ニ至ル、此路獅子之背水吞ノ郷、峯山崎尾野上ノ村ヲ過ク、近此ノ風雨ノ荒ニテ、觀世音ノ飯屋モ破レ、尊像五月雨ニ濡サセ玉フ、生平^{ツネ}ニ帰依スル所ナレバ、箕作ガ娘見ニ忍ガタク、我身ノ濡ハ兎モ角モト、其ノ笠ヲヌギ、御首ニ著奉リ、笠ノ内ヘ一首ノ歌ヲ聯ケル、

十九種ノ法ノ雨ウク尾野上ノ花咲世ニモ値ニケルカナト

斯テ道ヲ急ギ行ケルニ、箕作ガ娘一人笠着ザレバ、警固ノ武士共見咎レドモ、曾テ返答ノ辞モナク、又笠着ザレドモ雨ニモ濡ズ、

一行は程なく府中に到着し、田植え祭りも無事に終わった。多くの植女たちの中で、箕作りの娘「於茂利」の美しさは群を抜いていた。まさに「かほ見よと月も笠ぬぐ光かな」(『犬子集』巻第五「秋下」という体、国司は、娘がかの亡き后と似ていることに気付いた。

七月下旬、於茂利は都へ連れて行かれ、帝の后として迎えられた。彼女の願いにより、上総尾野上には飛驒の匠たちの手で素晴らしい観音堂が建立された。忽ち伽藍は完成し、法東院の勅額を賜わって大悲の威光はますます繁栄した。この寺は、娘が五月乙女の時、我が笠を觀世音に着せ、また、幼名を「於茂利」と称したことから、「於茂利ガ笠」という意味で「笠森寺」と名付けられたという。

縁起の文中、「長柄の早乙女」という言葉からは、『万葉集』『求塚』で名高い長良乙女が連想されよう。箕作りの娘という設定は『竹取物語』を彷彿させる。実際、同書はこの縁起に続いて「箕作が女美人之類例」として「富士山縁起」を引用している。

「於茂利」の京上は七月下旬とあるが、地藏盆は七月二十四日と決まっていた。田植えが重要な機縁となっている点、田植え地藏とも近しい説話であるといえよう。

田植かとおもや笠きた六地藏

梅柳

〔俳風柳多留〕第六十二編

笠とれば坊主也けり田植唄

一茶

〔文政五年〕『文政句帖』

尾張笠覆寺・上総笠森寺、ともに十一面観音を本尊とし、雨に濡れた尊像に笠を被せた信仰心が善報をもたらした。その筋は「笠地藏」と非常に類似しており、「笠地藏」の一変型「笠観音」とも呼び得る説話であった。観音と地藏とは最も人々に親しまれた菩薩であったが、説話の伝承されていく過程で入れ替わる場合もあり、関係は密接である。一例を挙げるならば、「ささやき竹」説話は、中世『法華経』注釈書では清水観音の説話、『地藏菩薩靈驗記』では勸解由小路の地藏靈驗譚として採録されている。⁽¹²⁾

「笠森寺」の御詠歌は、

日は暮る雨は降野に我ひとり 斯る旅には頼む笠森

という（『坂東三十三所観音霊場記』）。長南地方の菅笠は特産品であり、長南笠・殖生笠として知られた（『長南町史』第四章・最近世現代）。

按に上総庁南笠とはいへど其処にて造らず、其近在千田米道又留などいふ処にて作る、白挽歌に、

せんだよなみは皆笠どころ、笠の針めで目がかすむ

とうたふは是なり、

〔嬉遊笑覧〕卷二中・器用

大和国には、古く十一面観音を本尊としながら、平安時代以降は地藏信仰の拠点となった真言宗の名刹がある。現大和郡山市矢田町の矢田山金剛山寺、俗に呼んで矢田寺・矢田地蔵がその寺である。

先出の謡曲『笠寺』は、尾張笠覆寺の縁起に基づく作であった。ここに、もう一曲、近世に成立した同名異曲の『笠寺』がある（古典文庫『未刊謡曲集』九所収）。これは和州桜井寺・笠寺の因縁を説く。

筑前博多の住僧が、和州桜井郷にいる知己、武者所康成を訪うた。しかし、既に康成は世になく、彼が建立した一字の寺「笠寺」が残っていた。僧は里人に案内され、康成の墓に詣でた。里人は寺の由来を語って聞かせる。

抑当寺は矢田畑の笠寺とも、又は桜井寺共申なり、郷士康成はいとけなふして父におくれ、継父康成につらくあたりて、剩へ父の所領をも押領す、此恨みふかくして、天慶の秋の末かとよ、彼の寝屋に忍び入、継父を討と思ひしに、あやまりて母を害したり、康成なげき悲しめどもせん方なければ、それより矢田の地藏に月詣し、母の菩提をいのりけり、去程に康成いつしか重き病をうけ、様々に悪相を顕はし、すでに絶なんとせし所に、獄卒火車引むかへ、康成をうちのせつ、阿鼻地獄にぞ墮罪しける、其時地藏薩埵阿鼻城の門に至り、閻王につげ給ひて、康成を乞請給ふとおもほへて、すでに蘇生し日を経つ、重きやまひも平癒せり、いよ／＼信心ふかくして、ある暁の事なるに、矢田寺に参らんと家の門辺を立出れば、此桜井の道のべに、地藏薩埵頭はれて、康成にのたまふやう、汝、けふよりは、遠境の矢田寺に行べからず、我爰に來りて、其心ざしをうくべし、此笠を此所におくぞとのたまひて、かきけすやうにうせ給ふ、笠をおかれし所なれば、笠辻と申せしが、康成此寺を、建立有

し其故に、笠寺と名付又、桜井寺とも申なり、

右の作品は『矢田地蔵縁起』の「武者所康成」の説話に出ること、一読して明らかであろう。

矢田寺所蔵の絵巻の詞書によれば、大和国宇智郡桜井郷住人、武者所康成は幼少の時、父に死に別れ、継父からは冷遇された。遂に天慶五年九月二十二日の夜、継父殺害を企てたが、誤つて母を害してしまった。⁽¹³⁾その罪を悔い、彼は矢田地蔵に月詣をするようになった。天曆年中に康成は死去し、無間地獄に墮ちた。

物語の末尾は、

爰矢田寺の地藏菩薩地獄趣て月詣の志を哀御して、武者所がために煙に交り、炎に咽て扶御之間、御衣もすそこがれぬと見たてまつる、三日お経てよみがえる、其後此由を披露す、(『日本絵巻物全集』第二十九卷所収)

と結ばれ、「地藏の笠」の記述はない。絵は、地獄の猛火を背景に、煮えたぎる釜の中へ地藏が右手を差し延べ、康成を引き上げようとする瞬間を描く。この説話は『延命地藏菩薩経直談鈔』卷四第二十三話などにも引かれた。

笠召して地藏も立や辻踊

一茶

(『一茶一代全集』)

はひかけし地藏の顔も三度笠またかぶりたる首尾のわるさよ

(『東海道中膝栗毛』五編上)

矢田地蔵の与えた「笠」にも、当然、こうした連想は働いていたであろう。しかし、

汝、けふよりは、遠境の矢田寺に行べからず、我爰に來りて、其心ざしをうくべし、此笠を此所におくぞ、と告げる場面については、如何にも唐突な感を拭えない。この「笠」の持つ象徴性に思いを致すべきであろう。

「笠地藏」「叡山賀能」、矢田地蔵の靈験を説く「笠寺」、或いは「笠覆寺」「笠森寺」の縁起、注目すべき共通点の一つ、すべて仏に「笠」を献じた行為が現世利益・地獄抜苦の機縁となったことであろう。なぜ、これ程「笠」が頻出するのであろうか。

笠を奉った行為は仏に対する供養と解釈される。『十地経論』卷第三に、

一切供養者有三種供養、一者利養供養、謂衣服臥具等、二者恭敬供養、謂香花幡蓋等、三者行供養、謂修行信戒行等、

と述べられる通り、供養とは飲食衣服等の具を仏に奉る行為であった。雨雪に濡れ、或いは破字にまします尊像に笠を奉る行為は、仏像供養、或いは仏像莊嚴であつたと言い換えても良い。

諸経に於いて、仏菩薩の出現の場面などには必ず放光瑞が描写される。

頂有圓光、面各百千由旬、其圓光中有五百化佛、如釈迦牟尼、一一化佛、有五百菩薩無量諸天、以為侍者、擧身光中五道衆生、一切色相皆於中現、

(『仏説観無量寿仏経』)

仏像造立の際には、仏身から放たれる光相を象つて後光・光背が製作された。仏像の頭部背後の光相は頭光、身体背後の光相は身光と称される。平安時代には、簡素な光背も菩薩像に多く用いられるようになった。その中には、輪と光芒とを組合せた輪光背、そして、「傘後光」の作例が残る。安芸国光明院蔵阿弥陀三尊来迎図の中尊、京都観智院蔵不空絹索観音などが代表的作例として知られる。その線光は円に傘形、「阿弥陀笠」を彷彿させる造形である。

【開心秘決】第三「心経法事」に、「尋云、道場観簸箕光者何光耶、師云、簸箕者梵語也可考之、其光如亀甲、今般若并如比光有之、又余尊ママ可有之其光、(中略)頭光ニモ身光定アル也、尋云、簸箕光者、或其形如笠云、比事云何、師云、聽テ今光之様相似笠歟云」(京都大学附属図書館・日藏末刊資料文庫蔵)という。

「阿弥陀笠」は後光に由来する言葉であつて、笠を後ろへ傾けて被ると、笠の骨が阿弥陀の後光に酷似して見えることに依る。

【犬子集】は謡曲『誓願寺』に取材した俳諧を収録する。誓願寺の本尊は阿弥陀如来であつた。⁽¹⁴⁾

秋の朝大急かうするせん／＼に

露分まいる此誓願寺

あみだ笠はる雨につむ花がたみ

〔犬子集〕卷第十六「謡俳諧」

同書卷第五には「西へ行月のきるをや阿弥陀笠」とも見え、『本朝文選』卷八「笠塚碑」には「月のあみだ笠に、時雨霰のいかめしき音を、侘られたる佛もなつかしとて死後に此笠を乞うけ」とある。『冥途の飛脚』下は「後しぶきに降る雨はかたげて急ぐあみだがさ」と書き連ねた。

『驢鞍橋』では、阿弥陀笠を被った亡者が引導を頼みに来る。

此比丹波ニテ、何某和尚ニ、近里ヨリ亡者引導ヲ頼ミ來ル、時ニ和尚、納所ニ命ズ、納所夜中ノコトナレバ、六ヶ敷思ヒ、少シ腹立ナガラ行テ弔ヒ、還テ臥ス、半時程シケレバ、彼寺ノ門外サワガシク鳴渡、納所不思議ニ思、寮ノ戸少シ明テ見レバ、寺中日中ノ如ク輝キ、大門ヨリ人一人ヒヨツト入、ワツ／＼ト叫來ル、見レバ、先ニ我送りシ亡者也、白帷子ヲ着、頸ニツタツヲ懸、菅笠ヲ阿弥陀笠ニカブリ、竹杖ニスガリ來ル、足ハ鉄火筋ノ様ニ見タリ、

（下・第八十段）

亡者は鉄棒を振り上げた六尺余りの真黒な者に追われていた。戸の隙間から納所の寮につつと入り、「ドツチエ参ランヤ」と尋ねたので、納所は「我和尚へ行ケ」と送り出した。

『嬉遊笑覽』卷二中「器用」は「阿弥陀笠」について、宗因千句の「見返しの笠の内をもちらとみて 南無あみた仏恋はくせもの」、「統山井」の「仏の座雪に来てつむやあみだ笠」を引いてから、次のように説明している。

阿弥陀笠は笠の名にはあらず、笠を仰いで後の方へ着たるが仏の後光めく故にいふなるべけれど、さては阿弥陀に限りたることにはあらず、思ふに、守武千句に、南無あみだ笠きぬ人もなし、といへる秀句ありしより、あみ

だ笠は出でしなるべし、

「さては阿弥陀に限りたることにはあらず」、地蔵の光背もこれと同様ではなかったか。昔話「笠地蔵」の挿絵では、往々にして地蔵は目深に笠を被った姿で描かれる。しかし、その笠を少し「仰いで後の方へ着」せたならば、その像は、まさに阿弥陀笠を被っているように見えるであろう。

思うに、全国に流布した「笠地蔵」や諸書に書き留められた「笠」は、いわば「阿弥陀笠」であって、「笠」を佛像の頭光に見立てた趣向ではなかったか。実際の彫刻・絵画の作例には、像の頭部背後に円光を添えるものが大変多い。近江の山王十禅師本地仏、金台寺の矢取地蔵尊や同国永昌寺・永厳寺、京都広隆寺の地蔵尊の光背、数々の「経絵」見返しに描かれた諸仏の円光、「延命地蔵經和訓図会」に描かれた地蔵菩薩の姿等々、仏像頭部の背後に輪状の光を伴う例は枚挙に暇がない。

古く、仏像に「笠」を奉る時、人々がそこに円光・頭光を見ていた時代があったのだと想像する。「笠地蔵」「笠観音」の源流がそこにある。これらの説話は、頭光を仏像に供養し奉った一連の説話として把え直すことができるのではなからうか。

寛文十二年（一六七二）頃成立の『俳諧晴小袖』冬の部には、次のような句が書き留められている。

破れ笠を見て

笠のほねはひかり御光か雪仏⁽¹⁵⁾

注

(1) 真鍋廣濟『地蔵菩薩の研究』（三密堂書店、昭和三十五年）、速水侑「日本の地蔵信仰」（『新修日本絵巻物全集』第二十九巻、

角川書店、昭和五十五年) ほか参照。

(2) 「宇治拾遺物語」上第八十二「山横川質能地藏事」は、衣服を脱いで拜んだ為、地藏は質能を救い、足が焼けたと語る。

(3) 横川は源信の住した地であり、浄土教・地藏信仰の中心でもあった。「地藏菩薩靈驗絵詞」下「地藏靈驗所」の近江の項には、「實地房 讀賣法印 般若谷々 千手井々」などが挙げられてある。また、延享元年(一七四四) 書写の「山門三塔名所名木水名石舊跡記」「横川分」によれば、般若谷には「六地藏堂旧跡」があった。

(4) 拙稿「諸国一見聖物語」(「一乗拾玉抄」の研究)、臨川書店、平成十年) 参照。

(5) 美濃国安八郡墨俣町の明台寺には「笑地藏」の説話が伝えられている。「墨俣町史」(墨俣町史編纂委員会、昭和三十一年) によつて梗概を記す。「墨俣の笑地藏と云うは美濃国墨俣河の端に地藏堂あり、昔京都より関東へ下向の勅使俄に時雨する故に彼地藏堂へ立よりて雨やどりせられた。その時所の人にこの地藏のいわれを尋ねると、在所の人がいうには、この地藏はやがてこの墨俣河の橋柱が朽ちて水中にあつたのを、これをとりに作つた地藏である。種々の靈驗どもが多いと語つた。勅使これを聞き一首の歌を作つた。

朽ち残る真砂の下の橋はしら また道かへて人渡すなり

地藏この歌をききて御わらいになつた。それよりして墨俣の笑地藏といつていのである。(中略) 此の明台寺と同一の伝説を言へるものに、小熊橋杭笑地藏(もと小熊村にありしが徳川初期岐阜に移る)あり、又谷汲山華嚴寺にも橋杭笑地藏あり。「地藏菩薩靈驗記」のほか、「法華經直談鈔」「法華經鷲林拾葉鈔」「一乗拾玉抄」「ひそめ草」等々にも墨俣笑地藏の説話は収録された。

物語云、美濃國墨俣ニ奇特ノ地藏御座ス、是ハ朽チ残ル橋柱ヲ以テ作也、然ニ関東ヘ勅使下ル時キ、人多ク參ル故ニ道者ニ此ノ地藏ノ由来ヲ聞クニ、此ノ分ヲ語ル間、勅使哥ヲ読メリ、朽チ残ル真砂ノ下ノ橋シ柱ヲ又道チカエテ人渡ス哉、此ノ哥ヲ聞テ地藏咲ヒ玉フ故ニ、夫ヨリ咲地藏トテ威験新タ也云々、

(「一乗拾玉抄」 卷七・薬王菩薩本事品)

〔本朝俗諺志〕卷四第九「美濃笑地藏」では西行説話と融合して伝えられた。平塚正雄「濃州徇行記」(一信社出版部、昭和十二年)は「此歌は小野篁の作とも云傳へり」と述べる。「兵庫築島伝」卷一で和歌を藤原公任詠とするのは、智として迎えた小野篁からの連想によると思われる。地獄の冥官であった篁の説話は「一乗拾玉抄」卷六・随喜功德品にも書き留められた。

(6) 市古貞次氏蔵「笠覆寺観音縁起」(写本一冊・国文学研究資料館マイクロフィルム番号イ・1・1・13)の本奥書には「于

時天文拾年二月日 江州愛智郡笠寺村天林山笠覆寺 于時元祿九年^丙二月五日写之者也」とあり、本文の検討結果も勘案すると、国文学研究資料館本（青墨筆で記された対校本）と同系本を書写した本と思しい。

(7) 「」内は青墨筆の部分である。朱筆は主として訓みや濁点を付すが、通読の便を考え、今は省す。

(8) 『昭和現存天台書籍綜合目録』によれば、大永五年奥書「六即義」（妙法院藏）、文安三年奥書「秘密独聞抄」（福田藏）等々、ほかに『法華経直談鈔』（疎竹文庫本）等にその名が記されている。

(9) 三途台十八僧正はわずか十八歳で僧正に昇進した大識で、曾て此地への路で一童子が御供をしたいと願って恭しく僧正を伏し拝んだ。名は大二と云い三途台の一室に起居を許された。或る時僧正が大二の部屋を覗くと童子は鼻を長くして眠っていた。長刀を持って取って返した僧正が大二に切りかけるとあわてて逃げ回る童子は門前の松の木に登ろうとするところをねらい定めて斬りつけた。手答えがあつたが片翼を斬り落しただけで大二是逃げうせた。大二の居た部屋はその後も恐れをなして誰一人はいるものがなく、後、大二のほこらを建て片翼は永く三途台の宝物になつていた。

（第四章・最近現代）

長生郡教育会編『長生郡郷土誌』（大正二年）は、笠森寺の縁起について、「冷泉天皇の王子、五條宮、上総大守に任ぜられ、この地に来り、藏人清光の妹を迎えて姫宮をもうける。任期果てて、五條宮は帰京。姫宮は独りこの地に止まり、深く笠森觀音を信仰し、父との再会を祈つた。一方、後一条天皇の女御が世を去り、近臣は天皇を慰めるため、諸国に命じて美人を集めた。時に姫宮は選ばれて都へ上り、天皇の更衣となつた」と記す。

(10) 山東京伝作・歌川豊国画「笠森娘錦笈摺」は「笠森觀音利生記」「お花半七雪操伝」「籠釣瓶刀之由来」の合綴、文化六年識、冒頭に「十一めん 三十一番かづさのかさもり／ひはくる、あめはふるの、道すがら／かゝるたびぢをたのむかさもり」とあり、

ひがし上総の殖生の郡、獅子ヶ背総次むすめ袖垣は、つねに笠森寺の觀音を信じ、父母に孝行なること世にすぐれたり、父の病をかなしみ、てづからあまたの菅笠をつくり、その笠に觀音經の文をかきて田植女にほどこす、つひに父のやまひ治したり、のち觀音の利益によりて富貴の身となりぬ、

とある。『房総文庫』第四卷（房総文庫刊行会、昭和七年）に翻刻・挿絵が載る。

(11) 覚超については『元亨釈書』卷第四「叡山覚超」に伝記がある。その一節に「幼上睿山。有奇相。出舌過鼻。慈慧見之。大驚曰。聰明之相也。必爲國寶。納而爲上足」といふ。仏の三十二相の一、「広長舌」を踏まえた説話であり、「一乗拾玉

抄】卷七・如来神力品は、

科注云、福德ノ人ノ舌ハ至鼻_ニ、三藏ノ仏ハ髮際_ニ至ル、今至_ニ梵天_ニ者凡聖ノ外ニ出過セリ、極妙上天ノ頂文、舌ノ長キ事ハ虚言ヲ不云故也、是ヲ舌相覆面相ト云也、（十種ノ神力事）と説く。

(12) 拙稿「鞍馬の黒牛——」ささやき竹」攷——（説話論集）第五卷所収、清文堂出版、平成七年）参照。

(13) 「一乗拾玉抄」卷四は、矢田地蔵の靈驗譚として、武士が妻と母を誤つて殺害しようとした説話を引き、「堪忍」の重要性を説く。類話は「琉球千字卷」にも見出される。

物語云、大和国ニ矢田ノ地藏トテ御仏御座ス、故ニ其ノ在所ニ大キナル物有テ、在京シテ久ク留守也、然ニ婦国スル時キ、人ハシリ向テ語ル様ハ、此ノ間、永々ノ御留守ニ候間々男カヨイ候ト告ク、サテハ無念也トテ、我カ家ニ忍ヒ入テ見レハ、如案男来テ入、廳臺、仍テ押し寄テ男女共ニ打チ殺テ見レハ、一人ハ妻、一人ハ母也、是レ何事ソト云ニ、永々ノ留守ナレハ、一ツハ徒然ヲモナクサメ、一ツハ何ナル男ナントモ通フ事モヤトテ、為_ニ守護_ニ男ノマネヲシテ毎夜_ニ来リ給フ、不知_レ殺ス、故ニ道心ヲ起シ通世シテ兩人ノ後世ヲ訪、然ルニ、矢田ノ地藏ニ籠リ祈リ申様ハ、我無_レ過_カ母虚ク殺ス、願ハ此ノ重罪ヲ如何トシテ可免_レ哉、地藏サタ夢想ニモ示シ給ヘトテ祈念申ス、聽テ示現アリ、汝チ布ヲラセンニ、始メ夢ウムヨリ終リ織リハツルマテモ我カ名号ヲ精進威然ニ唱ヘテ、地藏菩薩ト号シテ是ニ法花経ヲ書テ可着_レ也、然ラハ迷途ニテハキトラル、事モ不可有、獄率ノ刀杖等不可留、示シ給フ也、是即チ法花ノ柔和忍辱ノ衣也、（卷四・法師品）

(14) 同書には、

上手のあみだ簾成けり
何にかハたとへん胸のあばら骨
という句も取められている。「阿弥陀胸割」と関わるか。

(15) 雪仏と後光とを詠み込んだ句は、ほかに同書卷第六「冬」に見出される。

光さ、ぬうちにおがむや雪仏 玄札
貞徳は満開の桜をも後光に見立てた。

光堂の花を

花見せんいざやあみだのひかり堂

貞徳

〔犬子集〕卷第二・春下）

〔犬子集〕